

## 性意識と女子教育

——大学生の意識を中心に見た——

### はじめに

「女子教育」ということが存在すること自体、女子の教育に問題があることを意味する。しかし、現実には、女子教育には多くの論議すべき問題が存する。しかして、それはどこから生ずるかといえ、以前はフロイト(S. Freud)流の生来的な要因、すなわち、「解剖学的宿命」——身体構造の男女差がそれぞれの気質や能力・体質に及ぼす影響は決定的なものである——によるものが絶対的であった。しかし、現在では、女子固有の生理的な要因ならびに女子が生まれて以来、今日までうけつづけてきた抑圧・差別の二点と考えられる。前者は生まれながらの性といえるが男性と異なる小形の体形・弱い筋力・活動に適さない三角形の姿勢などは彼女らに、消極的・受動的な性格を次第に賦与していくことと思われる。身体的・生理的な差異が心理的な差異を生じさせると考えることは可能であろう。月経などの生理的障害に悩まされ、また、これに付随しておこる貧血には相当なものがあり、女子青年の四分の一に達するという調査もある。<sup>1)</sup>この場合、女性

天 野 隆 雄

が長命であること、遺伝的に保護されていること、病氣にかかりにくいことなどは問題にならない。一方、後者は後天的な性・作られた性といえようが、女子が生まれて以来、今日までうけつづけてきた社会的・文化的な抑圧や差別である。これによって、彼女らは更に追隨的かつ受動的な生活姿勢を体得させられていく。「女だから……」してはいけない、「女のくせに」といわれつづけていれば、いつしか彼女らに弱者の意識・被支配者の態度を付与していくことであろう。事実、いくつかの調査によっても、「男らしい子」・「女らしい子」は極めて典型的である。久保千里氏によれば、「男らしい子」は一、知能は上または中位で、学習に積極的にとりくむ。二、いつも明るく、公正公平な態度で友人に接し、弱者をいたわる心情が強い。三、友だちの意見をまとめて、リーダーシップを発揮できる。四、協調性に富むが、正義感も強く、勇気をもって困難なことに立ちむかう。五、責任感も人よりすぐれ、ねばり強くやりぬく。六、ニューモアも解し、さわやかな感じがする。七、スポーツを好み、体力もある。「女らしい子」は、一、知能は上または中位で、学習ははじめにコツコツととりくむ。二、

やさしい気持ちで人に接し、こまやかな心くばりや思いやりのある行動ができる。三、協調性にとみ、行動はややひかえ目。四、おだやかだが、自己を正しく主張することができる。五、責任感も人よりすぐれ、ねばり強く、困難に耐えることができる。六、礼儀正しく、節度がある。七、健康で、容姿端正である。

オールポート (G. W. Allport) は、これを「二つの性に対して規定された役割がある。実際にはすべての文化において、男性・女性にとつての性の型に関する役割は特に厳密である」と述べている。<sup>(3)</sup> 換言すれば、男子に望まれる態度と女子に求められるそれとは決まっておリ、これに合致しないと排斥され、合えば歓迎される。一例をあげると、柏木恵子教授によれば、わが国における性役割期待を、男性に対する望ましい特性として、背が高い・活発な・積極的な・経済力のある・意志強固な・理性的・頭がよい・個性的・自信のある・女性をリードする・現実的等であり、他方、女性に対するそれは、気持の細やかさ・おしゃれ・行儀よい・愛情豊かな・かわいい・従順な・容貌の美しい・男性に依存的などにまとめることが可能である。<sup>(4)</sup>

これらを要約すれば、男らしさは例えば、力強さ・たくましさ・勇氣・包容力・決断力・活動性・さっぱりした気性・視野の広さ・知性・自我拡大性などに代表され、女らしさは、思いやり・やさしさ・しなやかさ・こまやかさ・受動性・依存性・従順・自我の弱さ・家庭的・母性・美・明るさ・情緒の豊かさなどに集約される。

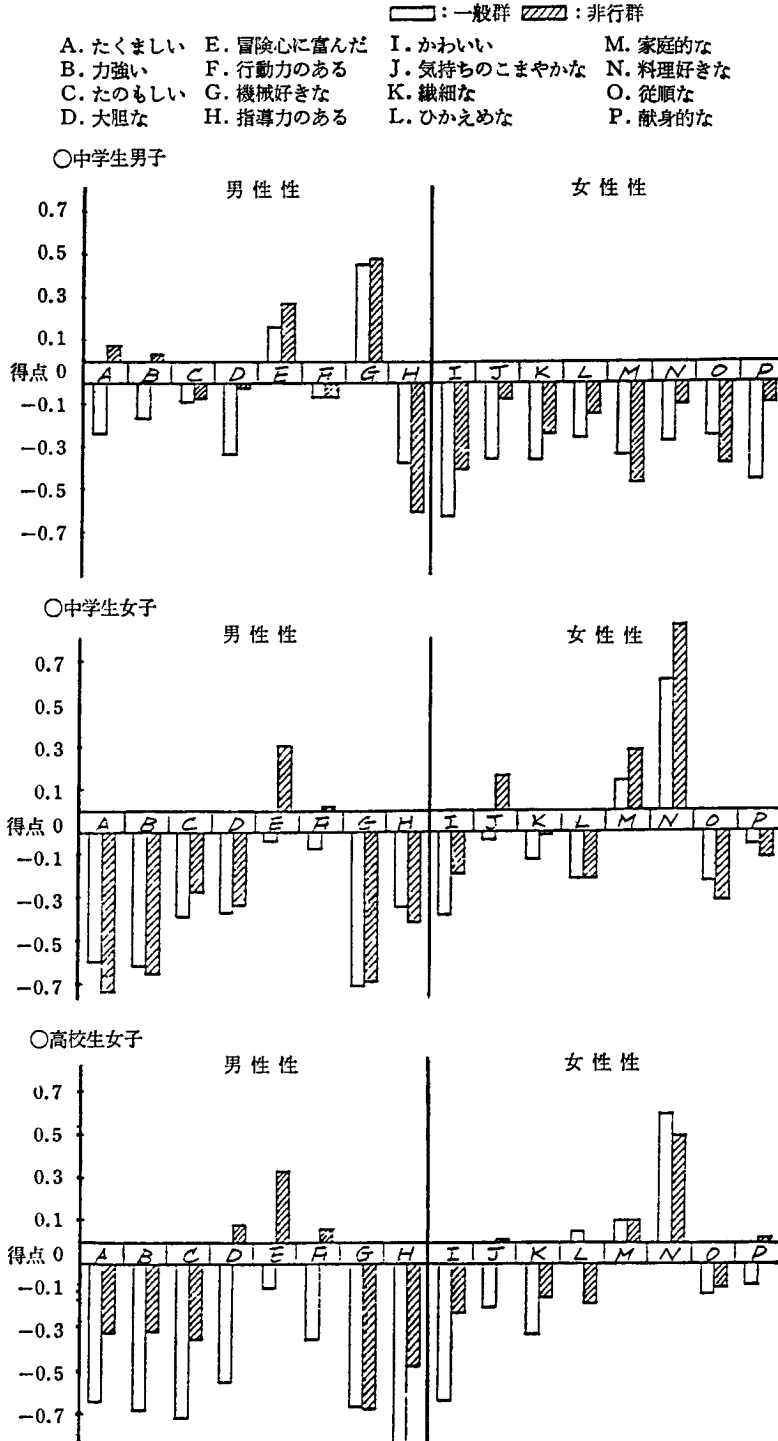
以上に加えるに、経済的・社会的に男性より自立の困難でかつ、将

来に不安をいだく女性は、よりいっそう社会的規範に沿おうと努める。巷間いわれる女らしくなることは、女性の人生における最大の関門ともされる結婚のチャンスに恵まれることを意味するからである。例えば、総務庁青少年対策本部の調査によっても、男性が結婚したい女性は「世話女房型」(五八・七%)であり、ついで「夫に甘えていたい」(二五・四%)タイプが続ぎ、「自立する女性」(二五・〇%)を求める意見は特に男性に少ないからである。しかして、男性が「自立する女性」を敬遠しがちな傾向をもつことは、また、女性たちの熟知するところでもある。彼女らは、長年のあるいは同年齢の同性の立ち居振舞を眺めながら、女らしさを学習し、会得していく。渡辺珠美氏の調査によっても、中学生位になるといわゆる自己の性にあつた性役割を身につけていることがわかる(図一)。なかんづく意中の人の前では、特に女らしくなることは、女性の知恵とも称すべきものである。

ちなみに、女性が結婚を願望する理由は次のようなものである。

本能的に女性は誰かに頼りたい。好きな人の世話をしたい、つくしたい。独身では経済的にも安定できない。独身では未来があまりにもさびしい。結婚した方が楽に生きていけるから。まともな女性なら結婚するのが当然という昔からの伝統があるので。好きな男性の子を生んで育てたい、これが女性の使命でもある。結婚することによって生き甲斐を感じる。色々なつとめ(出産・育児・料理・洗濯……)を得

図 1 形容詞別得点の平均値



ることができる。女性はその社会的地位も低く、社会で活動する場に乏しいため。結婚によって職業から解放される、そしてやすらぎの場・自分の城を得ることができる。女性は見栄と自尊心が強いので周囲の眼を気にしすぎる傾向がある。つまり、オールドミスなどとうしろ指をさされたくはない。すべての幸福は結婚にありというあこがれにいたもの。<sup>(7)</sup>

これらの多くが、男性依存である点に問題が存する。この傾向は、欧米においても同様であり、レノール・ハーモン (L. W. Harmon) (一九七一年) が千二百人の女子大学生 (一年生) を対象に子供の時の志望職業と青年期のをたずねたところ、半数以上が「奥さん」になることを過去に考え、その時も考えていた<sup>(8)</sup>という。

### 性意識に関する調査の意味

男が女になれるはずはなく、女を男にすることも不可能である。そこから、「女に生まれてよかったか、わるかったか」または、「男に生まれてよかったか、わるかったか」という問題を論ずるのは意味がないという考えが生じてくる。

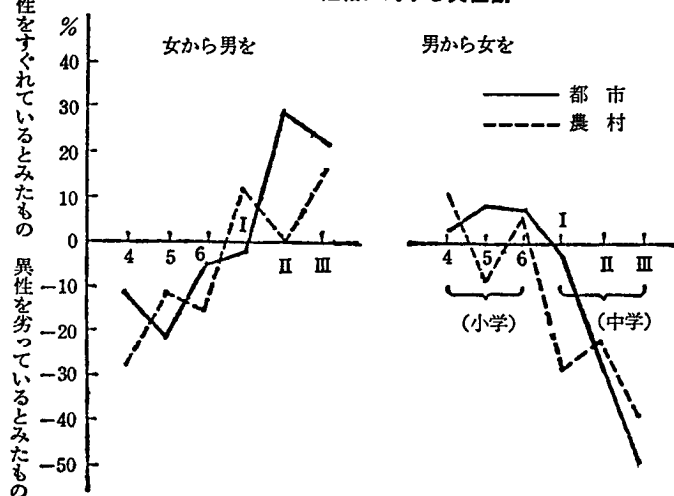
しかし、それは一面的なものである。その理由は、男女とも自己に与えられた性に対して、満足感をもって行動するのが理想だからである。自己の性に不満なこと自体が問題である。そこには、何らの明るい展望や期待をも見出すことはできない。これに関して、ホルナイ

(K. Horney) は、「無意識の (男性に対する) 羨望的態度は女性を彼女自身の徳に対して盲目にしてしまう。そして、母になることさえ彼女にとってはただ重荷となってしまう。万事が男性と比べられるので (すなわち彼女にとって本質的にあわない尺度によって評価されるので)、彼女は容易に自分自身を無能力であると認めてしまう。このようにして、我々は今日、その業績が明確でまた認められているような才能ある女性たちにさえ、相当の頼りなさを発見するのである。<sup>(9)</sup>……」  
と述べている。

たしかに、現実には自分の性に対して満足している者はかりではない。なかんづく、後述するように、女子には、自己の性役割に不満を有する者がかなり多い。また、自己の性を低評価する者も多く、例えば、「性格に関して小学生では特に女子が同性を劣等視するといった不安定性は認められず、むしろ男性をマイナス視する傾向があるが、中学二年以後になると、男子は同性を優位視し、女子は同性を劣等視することが強くなり、男女とも女性を劣等視することが認められる<sup>(10)</sup>」といわれる (図2)。

これは、種々の問題を含むものであり、女子教育を行なう際に根本的な問題となってくる。また以上の推移に対する考察も重要である。性意識に対する意識調査を行なうことによって、社会が女性たちに希望を与えるものになりつつあるのか、逆にそうでないのかが分明になる上に、更に、現代における男女差別に対する資料やこの問題のとり組み方に関する判断もが可能となってくる。

図 2 性格に対する異性観



異性をすぐれているとみたもの  
異性を劣っているとみたもの

は、「女の幸せと男の幸せはコインの裏表。男が幸せにならなければ女も幸せにならない」と述べている。ならば、「女が幸せにならなければ男も幸せにならない」ということもできるはずである。女性性は「天の半分を支える」という古い俚諺もまた至言である。なかんづく、

その性に生まれ  
てよかった点はま  
すます伸ばし、よ  
くなかった点は可  
能な限り正し、誰  
もが自己の性に生  
まれてきたことに  
対して、納得可能  
なまでになるよう  
に努力しなければ  
ならない。

かつて、「男は  
敵」の激しい運動  
を展開したアメリ  
カの女性解放運動  
のベティ・フリー  
ダン (Betty Fried  
an) 女史も、今

女性の場合、自己の性に誇りをもてるという自信にたつてこそ、女性の自立が達成される。これらに時宜にあったデータを提供するという意味からも、この種の意識調査にはやはり意義があるといふべきであろう。

### 現代学生の性に対する意識

本論の主題の検討方法として、K・J・D大学(二年)の男女学生に対し、「あなたは男性に生まれてよかったか」または「あなたは女性に生まれてよかったか」を質問紙法(多肢選択法)により、昭和六三年四月に実施した。また、この回答の最大の理由を一行で記すよう求めた。なお、この調査は、筆者が昭和四五年以降、随時実施しているため、その間の推移についても考察を加えた。「統計の連続性」は尊重されるべきであり、このような調査は、毎年のように実施し、データを集積の上、比較検討しなければならぬことはいままでもない。更に、A看護専門学校生七十七名(一年)と、B高等看護学院生二二名(二年)、及びC看護専門学校生二二名(一年)に対して行なった同様な調査は第三表のようであった。また、H調理師専門学校での同様な調査においても同じ結果が出た。なお、一年前の調査でも、「男性に生まれてよかった」男子学生は八一・〇%、「よくなかった」は二・七%、「わからない」一六・三%、「女性に生まれてよかった」女子学生は五六・五%、「よくなかった」一五・二%、「わからない」二八・三%と今回とはほぼ同様な結果を示した(昭和六二年五月、K・D大

学生（二年）男子二六三名・女子一三八名。

第一表 あなたは男性に生まれてよかったか（昭和六三年四月）

計	わからない	よくなかった	よかった	
一二三	(一四・六) <sub>一八</sub>	(二・四) <sub>三</sub>	(八・二) <sub>九</sub> (一〇・二)	K 大
三四	(一七・六) <sub>六</sub>	(〇・〇) <sub>〇</sub>	(八・二) <sub>四</sub> (二・八)	J 大
一一三	(一九・五) <sub>三</sub>	(二・七) <sub>三</sub>	(七・七) <sub>九</sub> (八・八)	D 大
二六九	(一七・〇) <sub>四六</sub>	(二・二) <sub>六</sub>	(八・〇) <sub>七</sub> (二・八)	計(%)

男子大学生

第二表 あなたは女性に生まれてよかったか（昭和六三年四月）

計	わからない	よくなかった	よかった	
五七	(三・一) <sub>六</sub> (一・八)	(二・九) <sub>三</sub> (一・一)	(四・九) <sub>二</sub> (一・二)	K 大
六九	(二・八) <sub>九</sub> (二・〇)	(八・七) <sub>六</sub>	(六・二) <sub>三</sub> (四・三)	J 大
九六	(二・八) <sub>二</sub> (二・七)	(二・二) <sub>五</sub> (一・二)	(五・九) <sub>四</sub> (五・七)	D 大
二二二	(二・九) <sub>三</sub> (六・五)	(二・三) <sub>二</sub> (二・九)	(五・七) <sub>七</sub> (二・八)	計(%)

女子大学生

第三表 あなたは女性に生まれてよかったか（昭和六二年五月～六三年四月）

計	わからない	よくなかった	よかった	
七七	(二・六) <sub>九</sub> (一・三)	(二・〇) <sub>八</sub> (一・六)	(六・二) <sub>三</sub> (四・八)	A 校
二二	(四・〇) <sub>九</sub> (九・九)	(四・五) <sub>一</sub>	(五・四) <sub>五</sub> (二・二)	B 校
二二	(二・三) <sub>八</sub> (一・五)	(〇・〇) <sub>〇</sub>	(七・六) <sub>二</sub> (一・六)	C 校
一二〇	(二・二) <sub>五</sub> (二・七)	(一・四) <sub>二</sub> (一・七)	(六・三) <sub>三</sub> (七・六)	計(%)

女子学生

第四表 あなたは男性（女性）に生まれてよかったか（昭和六三年六月）

計	わからない	よくなかった	よかった	
一四	三(二・四)	〇(〇・〇)	一一(七・八)	H校男子(%)
一五	二(一・三)	五(三・三)	八(五・三)	H校女子(%)

男子(女子)学生

社会において、かなりの辛酸をなめたと思われる看護学生も、この問題に対しては、女子大学生とあまり違いがないことがわかる。なお、筆者が大学生や看護学生を調査対象に選んだのは、現在、彼ら彼女らを相手に授業を行っており、データを得るのにもっとも都合なところ、及び自己中心的な三～八歳までの子どもは、男女ともに自己の性

の方を高く評価する傾向にあるなどの理由からである。もちろん、幼児・児童の性意識を対象にした研究・調査も多く、それなりの意義をもつことについては疑う余地はない。<sup>(12)</sup>

次に、以上の問題に関して、かつて、筆者の実施した同様の調査をあげる（第五～七表）。以上を比較して、年度別による共通点・相違

第五表 あなたは男性に生まれてよかったと思いますか（昭和五三年）

	K 大学	D 大学	計（%）
は い	六七六（八八・四）	九六（八五・〇）	七七二（八七・九）
い い え	五〇（六・五）	四（三・五）	五四（六・二）
わからない	三九（五・一）	一三（一一・五）	五二（五・九）
計	七六五	一一三	八七八

男子大 学 生

第六表 あなたは女性に生まれてよかったと思いますか（昭和四六年）

	一 年	二 年	三 年	計（%）
は い	一五〇（四四・四）	二八三（四八・二）	二二三（五一・七）	六六六（四八・四）
い い え	七八（二二・一）	一〇九（一八・五）	一七八（二七・九）	二六八（一九・五）
わからない	一一〇（三二・五）	一九六（二二・三）	一三七（三〇・四）	四四三（三二・一）
計	三三八	五八八	四五一	一、三七七

女子高 校 生

女子学生・女子生徒

第七表 あなたは女性に生まれてよかったと思いますか（昭和五三年）

	A 高校	B 音楽学校	C 看護学校	D 大学	計（%）
は い	二〇〇（五二・八）	一七二（六四・九）	二四八（五二・二）	六九（五・〇）	四八九（五五・九）
い い え	八九（二三・五）	五三（二〇・〇）	二七（二九・三）	五五（三九・八）	二二四（二五・六）
わからない	九〇（二三・七）	四〇（一五・一）	一七（二・八）	一四（二・〇）	一六一（一八・四）
計	三七九	二六五	九二	一三八	八七四

点を分析すると、女子の同性選択は男子よりかなり低く、男子のそれは常に八〇～九〇％と相当の高さである。また、「わからない」と「よくなかった」が多いのが女子の特徴となっている。更に、最近の調査ほど、女子の同性選択は増加している。例えば、詫摩武俊教授が、昭和三十一年に、ある大学の男女それぞれ三〇〇名の学生に、現在の性に生まれたことをどう思うかと質問した。そして一〇年後の昭和四十一年に同じ大学のはば同数の学生に同じ質問を試みた。一〇年のあいだにかなりの差がみられる。男子学生で女子に生まれた方がよかったと思っているのはどちらの調査でもごく少数であるが、女子学生では三一年には六八％が男子に生まれた方がよかったと答えていたのが、四一年には二二％に激減している。女子として生まれたことを積極的に肯定しているものは一三％から五四％にのぼっている。<sup>(13)</sup>

更に、ここでの調査とは若干異なるが、同性選択が年齢によってどのように変化するかを見ると、幼児期及び児童期の初期には女子にも相当の同性選択が認められるが、あと低下している。しかしながら、ある年齢になると再度上昇に転ずるが、もはや幼児期ほどの高さにはならない。しかし、男性の同性選択は常に高く不変である。一例をあげれば、小橋川は、八歳から一三歳の児童に「もう一度生まれてくることができるとしたら、男女のどちらがよいか」と問い、自己の性に対する満足度について調査を行なった。男児については各年齢とも約九〇%の者が同性選択を行なっているのに対し、女児の同性選択は八歳で九二%、一〇歳で六二%、一一―一三歳で二八%となっていた。稲垣は同じ間を一三歳から二〇歳について調べた結果、一二、三歳の女児では四〇%、一六、七歳で四二%、二〇歳前後で五四%の同性選択がみられたが、男子の約九六%の同性選択にははるかに及ばなかったとしている。この問題について古典的ではあるが、あまりに有名なものがボーヴォワール (Simone de Beauvoir) の『第二の性』である<sup>(15)</sup>。

たしかに、男性の方に自己の性役割を積極的に認めている者が多く、女性には不満をいだいている者が多いが、しかし、ボーヴォワールのこの見解は、現在そのまま容認されるものではない<sup>(16)</sup>。筆者の調査によっても、女子の同性選択は次第に増加しており、評価すべき現象であるう。しかし、男性の同性選択に比較してまだまだ比べものにならないほど低い点に問題があるといえる。なぜならば、自らの性を積極的

に肯定し、意欲的に生活するところに、初めて男性あるいは女性としての魅力ある生き方が可能となってくるからである。大体、自己の性に懐疑的であつては、積極的に行動できるはずがない。特に、女性は今後有望な人材をつくり育む重要な任務になっている。一層の自覚と努力とが望まれるゆえんである。

### 自己の性に対する肯定・否定の要因

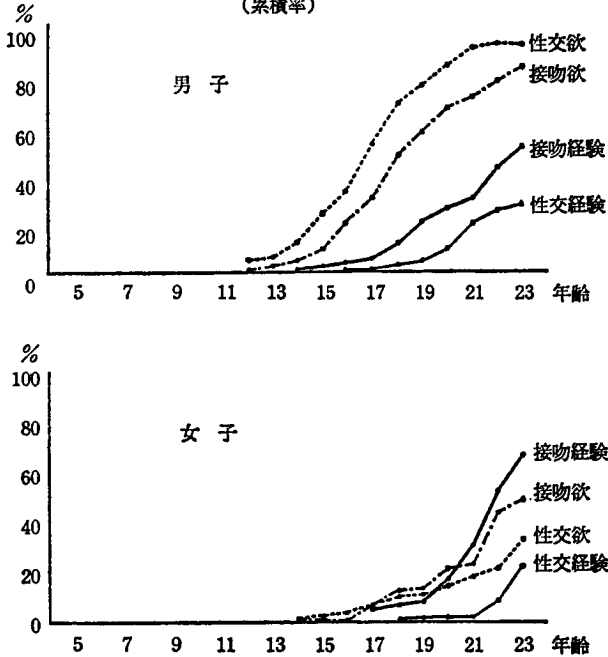
では、絶対的といつてよいほど、男子の多くが自己の性を肯定する要因はどこにあるのか。前述の調査において、学生たちがあげた回答に対する要因のうち、多いものだけを次に記す (六二・六三年の調査)。その要因は前回のものと異なり、今回は選択肢なしで回答を求めたので、全部あげると多くなりすぎるからである。

社会的制約が女子より少ない・なんでもできる・女は人生がまっ  
ている・社会的地位の上位者は男性がほとんどである・自分の力で人生を  
生きていく・男は面倒でない・女が好きだから・気楽・外泊が  
容易・自由である・思いきった人生が送れる・今楽しい・金がかから  
ない・格闘技ができる・化粧しないですむ・周りを気にしないで生き  
ていく・男は多少顔がわるくても性格でカバーできる・男中心の社  
会だから・子どもを生まないですむ・男の方が生理的・心理的に複雑  
でない・特に理由はない



「女が好きだから」は一見奇異な感じがするが、これは男性の本来的な性質であろう。ホルナイ(K. Horney)は、男女間の性道徳に関する実生活において、男性が女性よりはなはだしく誠実性を欠いていることを強く指摘している。<sup>(17)</sup>しかし、女性はこの点、道徳的でありまじめである。日常の行動も一般的にいわれる「まとも」なものが多い。<sup>(18)</sup>カント(I. Kant)は、彼の「人間学」の見地から、女性が一夫一婦

図 3 男性と女性の性的欲求・経験のふえかた  
(累積率)



制の結婚を希求することを説いている。<sup>(19)</sup>生理的な面、すなわち結婚を前提としない無軌道な性交は、女性に妊娠の危険性をもたらし、また、社会的には男性以上にそのふしだらを非難されるからである。また、本質的にもまじめな上に、性衝動の弱さも考えられる。<sup>(20)</sup>東京都小・中・高性教育研究会の調査(昭和六十二年一月・小学五年から高校三年までの児童・生徒・一〇、五一七名)によると、高校生の場合、「性交は結婚までいけない」・「婚約まで駄目」という否定派は男子で一二・二%、女子で三三・二%と男女間の考え方の違いには大きなものがあつた。<sup>(21)</sup>次に、女子学生が自己の性を肯定する要因は以下のようになつた(六二・六三年の調査)。

女性は母性をもっているから(子どもを生めるからが非常に多い)・おしゃれができる・「女なので」といいわけができる・楽だから・仕事や学歴などをとつてもあまり将来に負担がかからない・仕事をやめられる・経済的に家族を養わなくてもよいから・男より逃げがきく・女だから許されることが多い・男としてバリバリ仕事をしていく自信はない・人を愛した愛されることができる・女性だからというのはいやな思いをしたことがない

「子どもを生めるから」であるが、「女子の身体と精神は母たることのために作られたものであり、もし母であることができれば、彼女は真の満足感を得ることはできないであろう。」のホール(S. Hall)

のことが想起される。「おしゃれができる」であるが、カント (C. Kant) も、おしゃれを「他の女性たちをしのごうとする嫉妬」<sup>(23)</sup>とし、ルソー (J. J. Rousseau) も「の女性のおしゃれを擁護している。筆者の以前の調査 (女子高校生二・三年、五七六名、四五年六月、四七年一月、四八年六月) によると、おしゃれの中心となる衣裳に興味をあまりもたない者は、わずか一四名 (二・四%) にすぎなかった。<sup>(24)</sup>一方、男子大学生一・二年は三三四名中、四〇名 (一二・〇%) であった。また、最近の同様な調査によると、やはりおしゃれに大いに興味をもっている者は女子に多く、男子にはあまりもたない者が多かった (第八表)。

三好稔教授の著書にも、「両性性格を、実際の男女において見出すのには、体型と服装が最も診断価値において高い」とし「服装から性格の性を診断するのは、梅毒に対するワッセルマン氏反応と同じ意味をもっている」<sup>(26)</sup>とある。

以前、親が女の子 (女子高校生) に美のつく名前をつける率を調べたところ、一、四二九名中三二六名 (二二・八%) にも達した。また本年の六月の二四三名に対する調査 (女子大学生二年、一六五名、女子短大生一・二年、七八名) によっても五九名 (二四・三%) と同様であった。女の子に対する親の願望がうかがいしられる。

「女なので」といいわけができる・楽だから等であるが、たしかに男性依存の安易な生活態度の者が女子に多い。しかし、これが女性に生まれてよかった者の大きな理由とすれば問題である。結婚を逃げ場

第八表 あなたは衣裳に興味をもっていますか (昭和六三年七月)

男子大学生					女子大学生				
大いにもっている	普通	あまりもたない	計		大いにもっている	普通	あまりもたない	計	
K 大	(二・一三)	(六・六七)	(二・二五)	一一五	K 大	(六・三七)	(二・二七)	五八	
J 大	(二・九〇)	(三・八二)	(三・三四)	三四	J 大	(四・二六)	(六・八四)	五九	
D 大	(二・一三)	(五・六三)	(二・一二)	五七	D 大	(四・五九)	(四・二三)	七四	
計 (%)	(二・七三)	(五・九二)	(二・三三)	二〇六	計 (%)	(五・二四)	(七・三三)	一九一	

とすべきではない。父や夫になりたいという男性は少ないが、母や妻になりたいという女性が多い。しかし、そのような考え方では伸びる可能性をもつ者も伸びえない。しかしながら、女子には結婚に多くを期待して、すべてがこれを中心に回転していく傾向が強い。東清和教

授らの調査によると、大学四年生の女子学生が恋人（または婚約者）に「君にはやっぱり家にいてもraitたい」と要求されると、自分の職業志向を変容させ、伝統的な結婚形態を選ぶ事例のほうが多い（五八％）という。

「あなたは男性（女性）にとって結婚はもっとも大切だと思いますか」と男女大学生に問うたところ、肯定（はい）は女性に、否定（いいえ）は男性に多かった。結婚は一生を左右するという考えは女性に多い。一方、男性は結婚に対する価値観がかなり異なるといえる。女性の男性に対する依存の姿勢がかいま見られる（第九・一〇表）。

また、「女性だからといって甘える気がある」と答える女子学生は、相当な数にのぼっている（第二二表）。しかし、これは依存の姿勢で

第九表 あなたは男性にとって結婚はもっとも大切だと思いますか

（昭和六三年五月）

男子大學生	計	は い	い い え	わ か ら な い
K 大	一一八	(二七・三三)	(四七・五六)	(二四・二九)
J 大	三五	(四〇・一四)	(四二・一九)	(一七・二六)
D 大	六八	(二七・一九)	(五一・三五)	(二〇・六四)
計(%)	二二一	(二九・六六)	(四七・九一)	(二二・四九)

第一〇表 あなたは女性にとって結婚はもっとも大切だと思いますか

（昭和六三年五月）

女子大學生	計	は い	い い え	わ か ら な い
K 大	六二	(四〇・三五)	(四〇・二五)	(一九・四二)
J 大	六〇	(三一・七九)	(四五・二七)	(二三・三三)
D 大	八〇	(四一・三三)	(二七・五二)	(三一・三三)
計(%)	二〇二	(三八・七七)	(三六・七四)	(二五・五一)

第二二表 あなたは男性だからといって甘える気がありますか

（昭和六三年五月）

男子大學生	計	は い	い い え	わ か ら な い
K 大	一〇九	(二〇・二二)	(六四・七〇)	(一五・六七)
J 大	四一	(一九・五八)	(七三・三〇)	(七・三三)
D 大	七四	(二二・一九)	(七八・五八)	(九・五七)
計(%)	二二四	(二七・四三)	(七〇・五八)	(二・二七)

第二表 あなたは女性だからといって甘える気がありますか

女子大學生				
はい	(四二・二四)	K	大	
いいえ	(三〇・一七)	J	大	
わからない	(二六・八)	D	大	
計	五六	六五	八五	計(%)
				(五八・三〇)
				(二七・九)
				(二〇・六)

ある。その逆に、「男性だからといって甘える気がある」とする男子学生は少ない。この点にも、女性の甘えがかいま見られる。この理由のひとつは社会の影響であり、もうひとつは女子における甘えの構造である。次に、かなり多いが、女性が女子に生まれたことに対する不満の要因をまとめると左のようになった(六二・六三年の調査)。

男の方がさっぱりしている・女はねちねちしている・男は自由だから・女は制限をうける・男の方が将来性がある・男の方が社会で活躍できる・妊娠や出産・育児などでやりたいことができない・女はめんどくさい・家事をするのが嫌い・男子のスポーツができない

「男の方がさっぱりしている」であるが、女子には女子同志の友情

に疑問を感じ、男子のそれに羨望を感じる者が多い。<sup>(28)</sup> 女子には同性の女子を意外なほどひややかな目で眺めるところがある。例えば、以前に行なった筆者の調査によっても、女子にわるい点を認めない者は一・三%にすぎないのに、逆に、良い点は特になくとする者がその八倍の一〇・三%にも達している。<sup>(29)</sup> このようなことも、女子が女子に生まれてわかった理由のひとつを形成していると思われる。つまり、女性の敵は女性であるということになるが、この理由は女子が社会で男子と太刀打ちできないこと、また、フラストレーションの解消法が男子に比べて少ないことにもよるのである。しかして、男子と競合できなければその矛先は当然、同性の女性にむけられることになる。

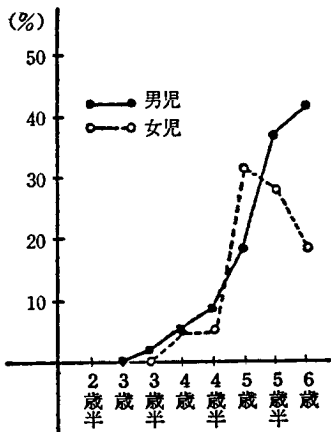
嫉妬に関連して見ると、嫉妬する子のほぼ三人に二人は女の子といわれ、嫉妬が一般に女兒に多いことが認められている。<sup>(30)</sup> 男性と異なり、女性の嫉妬が社会的に許容されやすいのも、女性を容易に嫉妬に駆り立てる要因になっている。もちろん、男性の嫉妬にもかなりのものがあり、時には女性以上ともいえよう。男性の嫉妬は職務上の競争が中心になりがちだからである。とはいっても、こと嫉妬に関しては、女性是非常に同性にきびしいとされている。例えば、アメリカにおいては、八歳の女の子の半分と一八歳の女子の三分の二がむしろ友達の間として男子を選ぶという。<sup>(31)</sup> バードウィック(J. M. Bardwick)も、女性の友達の間について述べている。<sup>(32)</sup> また、フェッシュバック(N. Feshback)も女兒の意地悪さを認めている。<sup>(33)</sup> ヒルティ(Karl Hilty)は、嫉妬が知識階級にはなはだしいものであることを述べて、

嫉妬をすべての感情のうちでもっともみじめなものとしている。<sup>(34)</sup>これはたしかに首肯できることばである。もちろん、他人を陥し入れるような嫉妬は論外である。しかし、過度の敵意を欠いた反省と向上に通ずる嫉妬ならば、自己発展のための刺激剤ともなり、競争心・向上心・愛情などを鼓舞し、個人の成長・文化の発展に好影響をもたらす場合も多いことであろう。全く嫉妬心がなくなってしまうたら、それはよほど達観した人物か、あるいは無気力な者といつてよからう。ラッセル (Bertrand Russell) も、「もし、ひとりのエジプト研究学者を、ほかのエジプト研究学者にむかってはめたとしたならば、百のうち九十九まで嫉妬心を爆発させるであらう」と述べているが、学問に対する刺激剤ともなればこれまた意味もあるといえよう。

「男は自由だから」・「女は制限をうける」であるが、たしかに女の子は生まれた時から家庭内で男の子以上に制限をうけ始める。例えば、女子高校生には、「夜おそく帰宅した」というので叱責される者がもっとも多かった。<sup>(36)</sup>しかし、これは女の子が性的被害者になることを懸念する両親の配慮でもあらう。しかし、このようなことは十分に納得させておかないと女の子に無用な反発をもたらすことになる。これらに対する以前の調査を見ると、自己のおかれている環境によって若干の差異も認められた。<sup>(37)</sup>すなわち、社会である程度苦勞を体験した者や男女共学の学校で男女の差別を痛感した者は、現在の社会の差別に憤りを感じ、女子に生まれてきたことに懐疑的であり、逆に、家庭環境のよい者や割に年齢の若い者には女性に生まれたことに満足してい

る者が多かった。更に、同胞が女ばかりか、または、兄がいるか、弟がいるか、あるいは独りっ子であるか等によっても多少の差が認められた。ただし、これらについては紙幅の関係から本稿ではふれない。<sup>(38)</sup> the boyish girls (男の子のような少女) というものがあるが、彼女らは女子に対するこのような社会の抑圧をいやというほど体験し、男子になりたいと切望する女性の典型である。<sup>(39)</sup> 女の子は、「女の子のくせに」といういわゆる「オトコ社会」の抑圧の中で、次第に不満をつのらせていく。しかし、男児が女性役割をとると非難されるが、女児が男性役割をとっても叱責されることは少ない。よく、「女にしておくのはもったいない」といわれるが、これは、その人個人をほめてはいても、女性全体を蔑視したことばではある。しかし、男子と女子の性に対する意識については、問題は明らかに女子の側にある。年長児になると、異性玩具を「これは女のおもちゃだ」、「男

図 4 異性玩具の回避



の子のはいやだ」など回避する者が漸増してくる。しかし、この場合、年長女児の回避率が減少している点には注目したい。この理由としては、①男性役割には社会的利点が多いので女児もこれを好む、

②女兒が男性役割をとることに社会は比較的寛容である、などが考えられる<sup>(40)</sup> (図4)。

男性は原始時代においては、その体力的な強靱さと敏捷性の故に外で獲物を捕るといった役割を、女性は体力の弱さと子どもを生み育てるという機能のために家の付近にとどまるという役割を担ってきた。

これは生理的な要因である。しかし、現在のような複雑な社会においては以上の諸問題を生理的な要因や差異だけで説明することはもはや不可能である。現に、社会的・文化的な差異は、赤ん坊が生まれた瞬間から始まっている。一例をあげれば、多くの病院の分娩室においては、生まれたばかりの赤ん坊を、性器の体裁によって決定したあと、その性にもとづいて、ピンクかブルーの毛布に包み分けるのが慣例である。この瞬間から、子どもの男らしさまたは女らしさが絶えず強化されていくことになる<sup>(41)</sup>。また、その後の玩具や子どもに対するよびかけひとつにしても性差が意識されている。

たしかに、筆者の調査によると、女子で自己の性に不満足な者は、生理的な要因よりも社会的・文化的なそれの方がはるかに多かった。その要因であるが、生理的なものは、「皆がそうだから」と考えれば、連帯感もわきあきらめることも可能であろう。その比率は女性に生まれたくなかった者のおよそ六分の一程度であった。しかしながら、女性軽視の社会的・文化的な要因はそうはいかないことを銘記すべきである。少なくとも、現実の社会は男性中心であり、多くの利点が男性役割に存することには注目すべきである。なお、この事実は諸外国に

においても同様である。この結果、両親その他の男児志向は根強く、例えば、現在の中国においては、人口過剰から独りっ児政策がとられているが、それ以来、男児の出生率が異状に高くなっている。これは生まれてきた女兒の圧殺や遺棄など人為的な作用が加えられた結果である。女の子を生んだ嫁がいびり出される傾向が強い<sup>(42)</sup>というのは、やはりこのような行為が行なわれる素地が潜在しているといえよう。この現象は単にわが国や中国だけではなく、欧米でも同様である。ハマー(M. Hammer)が一九七〇年に、「もし一人だけ子供を持つとしたら、どちらが欲しいか」という質問を未婚の学生に行なったところ、男子学生の九〇%、女子学生の七八%が男児を選んだ。更に、あるアメリカでの調査によると、親が子どもの性を自由に選び得る場合、年間三〇〇、〇〇〇人以上も男児が女児より多くなるという結果<sup>(43)</sup>が得られた。ただ、最近はこの傾向に変化が現れてきたというデータも見られる。例えば、六三年五月四日付で総務庁が発表した人口推計(六二年六月、全国から抽出した妻の年齢五〇歳未満の夫婦一万余組に調査票を送り、回答のあった九千七百票の中から妻が初婚の八、八八一組について集計した)によれば、「理想とする男女児の組み合わせ」では、三子を望んでいる夫婦の場合、前回(五年前)は「二男一女」が六割強、「二男二女」が四割弱だったのが、今回はほぼ半々に接近した。また、「二人っ子」の場合では「男児」が四割弱、「女児」が六割強、「二子を望む夫婦の場合でも、「二人とも女児」が、「男児だけ二人」を倍以上も上回った<sup>(44)</sup>。老後の面倒を頼みたいのか、相談相手とし

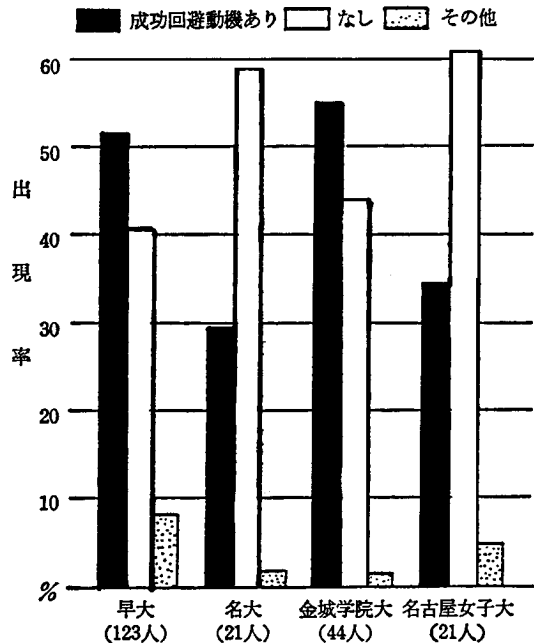
たのか、その理由はさだかではない。

この自己の性を肯定あるいは否定する者の要因は、以前の調査においても、今回のそれにおいてもそれほど差異は認められない。<sup>(47)</sup>ただし、これらは問題と国によってちがいがあり、例えば、男女の性役割観（男は外で働き、女は家庭を守るべきだ）（国際比較・一九八三年調査、一五―一八歳）によると、フィリピン賛成六五・一％、反対三四・九％、日本は賛成四四・五％、反対三五・五％、無答二〇・一％、韓国賛成四一・八％、反対五三・七％、無答四・五％に対し、欧米諸国においては、例えば、フランス賛成二二・六％、反対七三・八％、無答三・六％、イギリス賛成一九・五％、反対七三・六％、無答六・九％、アメリカ賛成一八・六％、反対八〇・六％、無答〇・八％ときわだつた差異を示している。<sup>(48)</sup>この問題に関する東洋諸国と欧米諸国との相違がうかがいしられる。このような問題に対して高い意識をもっていると考えられる「お茶の水女子大学学生の生活と意見報告」（昭和六〇年・お茶の水女子大学文教育学部哲学研究室）によっても、「男女の伝統的役割分業観をどう思うか」については、「止むをえない」が五三・五％。一年から四年まで全体の過半数をこえた。止むをえない理由の一位は「出産・育児は女にしかできないから」（二一・四％）であった。<sup>(49)</sup>

東清和教授らの調査によっても、女子学生の成功回避動機にはかなりのものがあるが、理由なしとはいえない。<sup>(50)</sup>

また、朝日新聞社が六一年三月二五日から七月五日まで、火・木・

図 5 女子学生の成功回避動機の出現率



土曜日付の朝刊四面に連載した「女と男」（シリーズ四五回・二三二通）を見ると、「女は得なこともあるが結局は損でつまらない」ということであり、よかった理由は、母親となることができる喜びに凝集された観があり、つまらない理由は、職場でも家庭でも現実の壁に悩まねばならない、結婚・育児・家事などや給料・地位・信用などの社会的差別・不平等の問題が中心であった。事実、ILO（国際労働機構）の調査によっても、わが国の男女の賃金格差は、男子の賃金を一〇〇とすると、女子のそれは五三と主要先進国の中でも最大であった。

これらの事実はやがて女子（妻）が男子（夫）に扶養される運命にあることを暗示している。たしかに、生まれた時から「お前は女だから適当にやっておればよい」と教育されつづけていれば、どうしてもこのような考え方になってしまうことであろう。フェヌロン（Fenelon）のいった、「女の子たちは、しっかりした規則正しい行為ができないようにかの女たちをさせてしまふところの、無氣力と臆病のなかで育てられます。」<sup>(52)</sup>とのことばは時代がちがっても未だかわらぬ一面をもつといえよう。

職業興味における男女差を見よう。「新訂・職業興味テスト」（金子書房）における高校生の職業興味領域ごとの平均得点の男女性は、男子が「機械的」「研究的」興味領域で高く、女子では「对人的」「芸能的」興味領域で高くなっている。<sup>(53)</sup>しかし、これらの性差は、また多くは歴史的・社会的な性役割観に由来するものであろう。すなわち、女性性は理科系に弱いとか、女子の教育は結局は主婦になるための準備教育である、とする観念である。現実には、親が子どもに「おまえは女の子だから、数学や理科はあまりやらなくてもよい」とか「お前は、どうせ結婚すれば家に入るのだから」などといったつづけていれば、いつしか女の子たちもやる気をなくし手をぬくようになっていくことであらう。

たしかに、男女雇用機会均等法は施行された。しかし、現在の日本の社会はまだまだ男女平等の社会にはほど遠いものがある。筆者の高校や大学時代の同窓会名簿を見ると、勤務先が空欄になっている女性

が大部分である。男性優位の状態はいぜん続いており、その結果、例えば、男性依存や結婚の重要性を否定する女性は多くはない。<sup>(54)</sup>

津留宏教授によれば、依存性と自主性の不足とが女子の女子の特徴のひとつとなっている。<sup>(55)</sup>しかし、これはたまたま女子として生まれたために周囲から女の子としてしつけられ、社会の通念として存在する女というわくの中にあてはめられているうちにこのような特徴が形成されてきたのであろう。しかしこれらはやがて女性のあまえやあきらめとなって現われてくる。例えば、県立福島女子高校新聞の調査によると「結婚しても働くか」に対して「定年まで働く」は二％。神奈川県・京浜女子高新聞「仕事に生きがいを求める」は九％、静岡・藤枝女子南高新聞「仕事に生きがいを求める」九％で、一般的には女子高校生の働くことへの意欲は低く、専業主婦を夢みている。<sup>(56)</sup>

次に、第一三表と第一四表を見ると、男子で「女みたい」といわれることに対して反感を感じる者は三分の二をこえるが、その主な理由には、「弱々しいと思われるのはイヤだから」、「これほど情けないことはない」、「意気地なしのように思えるから」、「ふざけるな僕は男だ」、「気分がよくない」などであり、その逆に、女子で「男みたい」といわれることに反感を感じない者は過半数をこえているが、その主な理由には、「男の人のさっぱりした性格が好き」、「何か自分が認められたような気分がある」、「男の人に悪いイメージをもったことがないのでかわれても反感を感じない」などであった。

女性は男性に比べて生理的に不利な点をもつ上に、これまでは社会



第一三表 あなたは「女みたい」といわれることに反発を感じますか  
(昭和六三年四月)

計	わからない	いいえ	はい	
一一四	(六・二) 七	(二四・六) 二八	(六九・三) 七九	K 大
四四	(二・三) 一	(二〇・五) 九	(七七・三) 三四	J 大
九六	(二〇・八) 二〇	(一八・八) 一八	(六〇・四) 五八	D 大
二五四	(二・〇) 二八	(二・七) 五五	(六七・三) 七一	計(%)

第一四表 あなたは「男みたい」といわれることに反発を感じますか  
(昭和六三年四月)

計	わからない	いいえ	はい	
五六	(七・一) 四	(六二・三) 五五	(三〇・四) 一七	K 大
六五	(一八・五) 一二	(四七・七) 三一	(三三・八) 二二	J 大
九一	(一五・四) 一四	(五九・三) 五四	(二五・三) 二三	D 大
二二二	(二四・二) 三〇	(五六・六) 二〇	(二九・六) 二二	計(%)

的に抑圧されつづけてきた。その結果、あきらめの意識をいだいている女性には少なくない。たしかに、男子にとって、青年期は自己の生涯の方向と内容を決める全生活的なものである。一例をあげれば、大学入試においては、男子の場合、合格することは至上命令であり、今後の人生を決定づけるほどの重要性をもっている。それ故、大学への進学率も昭和六一年においては、男子三四・二%、女子一二・五%と大きなへだたりが見られるのも理由なしとはしない。男子と女子は、同じスタートラインの上になつてゐるとはいいがたい。女子の場合は青年期が結婚のための準備期とみなされている点に問題があるといえる。男女平等が理想的に行なわれていると思われるアメリカにおける調査(独身女性一六、〇〇〇人、回答者の大多数は二五〜三九歳・大学卒か大学で一年以上教育を受けている。九三%が仕事をもっており、八七%はフルタイムの仕事についている)ですら、「いつかは結婚したい?」の間に、はい六五%、いいえ七%、わからない二七%、無回答一%と結婚なんかしたくないと思つてゐる女性は七%にすぎなかつた。<sup>58)</sup>これは、アメリカにおいてすら女性に対する社会の不平等に原因があると思つてよからう。結婚のいかにともない他の問題はおのずから解決されてしまふ。かくして、女子の青年期は男子のように、いかに自立するかという課題を中心に展開されることは少ない。この点に、これまでの社会構造の責任と女性自身の甘えとを見る思いがする。<sup>59)</sup>女性が結婚に逃避する限り、男女平等の社会はあり得ないと知るべきである。他に生きる場所がある上での「逃げ場」ではなく、最初か

ら結婚という「逃げ場」しか与えられていないところに問題がある。結婚を人生の目標として育てられてきた女性たちは、結婚生活が破綻した時は明日からの生活の保障も見出すことはできない。面白いことに、女流作家の作品を読んでいくうちに、いつしか待つ気持・受身の姿勢にさせられてしまうことがよくある。それはその作品を執筆した彼女らが自己本来の生理的な待つ性に加えて、いつも待つ生活をし（いられ）てきた結果であろう。かくして、ボーヴォワール (Simone de Beauvoir) の述べているように、「……彼女は十二歳だが、もう既に彼女のストーリーは天国では出来ている。女の子は自分でストーリーを作らず、来る日も来る日もその出来上がっている筋書きに従うだけである」ということになってしまふ<sup>(60)</sup>。

### おわりに——女子教育のために

昭和六三年四月一六日の朝刊各紙に、次のような政府広報(労働省)が掲載された。

「いま、個性が性を超える——第四〇回婦人週間「四月一〇日～一六日」——家庭、社会、職場において次のような考え方が残っていないかこの機会に見直しましょう。・「男の子だから」、「女の子だから」というしつけをしていませんか。・家事、育児、老人の世話に妻だけの仕事と考えていませんか。・職場では「女性は補助的な仕事」と限定していませんか。・女性は控え目なのが一番よいと考えていませんか。」

しかし、このような広報が出ること自体、未だ男女平等の社会が達成されていないことを意味している。また、昭和五五年六月、大阪の婦人団体が集まって「女性差別一一〇番」を開設した。更に、同五〇年の国際婦人年とそれに続く「国連婦人の一〇年」の世界的な運動の高まりの中でも、現今の社会にはまだまだ「オトコ社会」の様相が強く、男女平等への道はむしろけわしい。このような社会においては、一見意味のないように見えても、「男に生まれた方がよいか」、あるいは「女に生まれてきてよかったか」という問題に対する考察はやはり必要である。なぜならば、これは女子教育に根本的な問題を提起するものであり、これあるいはこれに基づく一連の問題に対する彼女らの意識にふれることなく女子教育を論じすすめることは危険だからである。一例をあげれば、調査の結果、女に生まれたくなかったという女性と比較的多く、男に生まれてよかったという男性は圧倒的多数にのぼったが、それはこれまでの女子教育及びその他の周辺事項に関して、なんらかの問題が存在することを意味するからである。しかして、この場合の基礎をなすものは、現在の男性中心社会における女性に対する差別意識である。

なるほど、男の子も女の子もともに人権を有する。しかし、男女平等はまだその緒についたばかりであり、男尊女卑の觀念にはまだまだ根深いものがある。男性上位の風潮は依然として存続しつづけ、男の子にその優位性を発揮させたいという親の願望には強いものが認められる。もっとも、これらの点については当然のことながら時代差も大

きく、漸次改善の方向に向いつつはあるといえる。例えば、アメリカにおいてすら、一三六年前は状況は全く反対であった。次の一文は、一八五二年、シラキュースで女性解放運動に関する集会が開かれた際、『ニューヨーク・ヘラルド』紙にのった社説の要旨である。

「この女性解放運動の会議に参加した人びとというのは、男の心をそそらないオールドミスや、結婚生活がうまくいっていない主婦や、間違つて女に生まれてきた男のような女や、虚栄心が強くて自分の演説が活字になるのを見たい女や、非常に真剣であるが、非常に狂つてゐる夢想家たちであり、男性に至つては、その過半数が女房の尻の下に敷かれてゐるような亭主たちで、この会議に参加した男性はすべてベチコートを着た方がよい連中だ」

ただし、このような考えはたとえ形状は異なつても、未だ現在の社会に潜在している。

なお、女児においては学年がすすむにつれて次第に男性志向が強くなつていくのが特徴となつてゐる。<sup>(62)</sup> また、女性では、学歴の高いほど、また年齢の若いほど、異性への生まれかわりの希望が強いことが見出されるといわれる。しかし、筆者の調査した範囲では必ずしもそうではなく、むしろ年頃の若い女性にこそ女性に生まれてよかったという者が多かつた。<sup>(63)</sup> 一時期、女性に生まれたことに不満を感じる女性が思春期になるとやや回復を見せ始めるのは、既述したように何らかの意味で女性に生まれてきたことのメリットを見い出すためであらう。今、青春のまつただなかにあり、異性からちやはやされる彼女らが、自己

の性に満足していることは十分に理解されるし、また非難されるべきことでもあるまい。

女子が自己の性に疑問をいだく理由については、女性の体力の弱さ・体位の劣弱・生理・妊娠・出産のような生理的なものよりも、男子のように自由がないから・彼らのように社会で活躍することが少ないから・女であることで禁止されることが多いからなどのような社会的・文化的な要因が圧倒的に多かつた。生理的なそれは二割以下と見てよいのではなからうか。筆者の以前の調査では、一八・〇%と一六・四%というデータが出てゐる。<sup>(65)</sup> 生理的な制約は天から与えられたいかんともしがたいもの、同性の女性はずべてこれらを受受してゐると考えればあきらめることも可能である。さすれば、これを気にせずといふと思へば、ある程度は我慢もできるが、社会的・文化的制約はそう簡単に払拭できるものではないことを痛感させられる。

わが国における性役割は、未だ「オトコ社会」のなごりの中にあり平等とはいえない。男性が、男性役割を積極的に受容してゐるのに対し、女性は女性役割を否定的にしを受容してゐず、伝統的性役割と自己の期待する性役割とのあいだにズレを認知してゐる。そして男女とも、女性役割を男性役割より低く評価してゐるということになる。<sup>(66)</sup>

女性が高等教育をうけて職につき、結婚もせず仕事一筋にはげもうとしても、やはり男性と比較して仕事には限界がある。仕事を生き甲斐とするにはほど遠い場合が多い上に、将来性にも乏しい。結婚後、仕事を続けていくとしても、仕事と家事・育児の両立は負担が大きす

ねばならない。すなわち、自らを問題解決の中心的担い手にしようと努める強い姿勢とそれにもまして地道な努力とが必要であるということである。

最後に一言付加するならば、性別役割分業が様々な社会問題の源泉となっているといえる。これが性差別を生み出しているからである。

もちろん、男女は完全に平等である。しかしながら、わが国における伝統的な性別役割区分は女性に対してあまりに拘束力が強すぎ、この役割区分の変革は緊要事である。

しかし、男性と女性の間には明らかに生理的・心理的な差異が存在する。しかし、両性は本来異質なものであるが故に、人生はますます味のあるものになっていくといえる。万一、男と女が同一なものであるとしたならば、そこにはなんらの魅力も感じることはできないであろう。男性にとっても、永遠に女性なるものわれらを導く(ゲーテ『ファウスト』)であってほしい。また教育においても、よい意味の男らしさ・女らしさを発揮させることが大きな目標のひとつになるべきであるといわねばならない。

#### 注

(1) 筆者の調査によると、女子高校生一・二・三年(一、三三五名)のうち、貧血を訴える者はほぼ四人に一人の二三・七%に達した。(天野隆雄、『増補若い女性の心理』、昭和六二年、成文堂、一八頁)

(2) 久保千里、「小学生の「男らしさ」「女らしさ」の教育」、『女子教育』第六号、昭和五八年、目白学園女子教育研究所、五〇―五一頁。

ぎて健康の危険にさえさらされる。とはいっても、いったん職をはなれば後はバート位しか残されていない。経済的な自立なしには離婚の自由すらないことができる。現在のままでは、女性の前途は決して明るいとはいえない。しかしながら、自己の性にマイナスイメージないしは劣等感をいだくことは、己れの能力を蔑視したり、またその能力の開発を怠ったり、更には自己の能力に絶望したりすることにも通ずるので、女性であることを極力誇りに思い、その実力・才能を十分に生かすように努めねばならない。男性も女性も、それぞれのもてる力を最大限に発揮しあい、その価値をたがいに認め、尊重しあうことが肝要である。問題の解決は、女を男に改造することであるということであってはならない。それには、男女平等の社会を建設するための男性の協力――例えば、女性が社会で自立・活躍できる場の保障やそのための社会的諸条件の整備などの社会構造の改善・家庭における男性の協力など――も、もちろん欠かすことはできない。アメリカでも、成功している女性や達成志向の強い女性の特徴の一つは男性の支持や奨励を受けているとの説も存在する位である。一九七九年一月、国連総会において、「婦人に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」が採択された。しかしながら、現在のわが国においては、女性が家庭人・職業人・社会人として、自己の能力を最大限にいかし発揮していくためには、まだまだ社会的諸条件の整備が必要であるといわねばならない。しかし、女性の側も苦しくなると、「私は女なのだから」と安易な方向に逃避しようとする弱さや甘えは捨てさら

- (3) G. W. Allport, *Pattern and Growth in Personality*, 1961, Holt Rinehart and Winston, p. 182.
- (4) 柏木恵子, 「現代青年の性役割の習得」, 大西誠一郎ら編, 『現代青年の性意識』, 昭和四八年, 金子書房, 一〇四頁。
- (5) データ・バンク編集委員会編集, 『教師のためのデータ・バンク』, 昭和六二年, 啓明研究会, 六八頁。
- (6) 渡辺珠美, 「性役割の認知と非行の行動」, 『人間研究』第二二号, 昭和六一年, 日本女子大学教育学会, 一三六—一三七頁。
- (7) 天野隆雄, 『女子生徒の心理とその教育』, 昭和五八年, 早稲田大学出版部, 一九〇頁。
- (8) J. ブルックス・ガン・W. シュンプ・マチュウズ, 遠藤由美訳, 『性別役割その形成と発達』, 昭和六〇年, 家政教育社, 三一九頁。
- (9) K. Horney, *Feminine Psychology*, 1967, Routledge and Kegan Paul, p. 75.
- (10) 間宮武, 『性差心理学』, 昭和五四年, 金子書房, 二五二—二五四頁。
- (11) 小橋川慧, 「性差と性役割の獲得」, 依田新ら, 『児童心理学講座 8 人格の発達』, 昭和五〇年, 金子書房, 一五五頁。
- (12) 前掲書や渡辺真理子, 「幼児の性差意識・性別制」, 『教育心理』第二六巻第四号, 昭和五三年, 日本文化科学社, 五六—五九頁など。
- (13) 詫摩武俊, 『心理学』, 昭和五二年, 学陽書房, 一八五頁。
- (14) 稲垣知子, 「性別役割の習得過程」, 津留宏編, 『性差心理学』, 昭和四五年, 朝倉書店, 一四四頁。
- (15) ボーヴォール著, 生島達一訳, 『第二の性』I, 昭和四四年, 新潮社。
- (16) 天野隆雄, 『女子生徒の教育』, 昭和六一年, 成文堂, 一六七頁。
- (17) Horney, *op. cit.*, p. 95.
- (18) 天野隆雄, 「男子学生と女子学生の精神的健康度」, 『教育学論叢』第四号, 昭和六一年, 国士館大学教育学会, 参照。
- (19) I, Kant, *Anthropologie*, heraus, von O. Buek, I. Kants Werke Band 8, 2. Aufl. 1922, Bruno Cassirer, s. 197.
- (20) 朝山新一, 『性教育』, 昭和四二年, 中央公論社, 一四一頁。
- (21) 「朝日新聞」(朝刊), 昭和六二年一〇月六日。
- (22) G. S. Hall, *Adolescence its Psychology*, Vol. II, 1918, D. Appleton and Company, p. 610.
- (23) Kant, *op. cit.*, s. 200.
- (24) ルソー著, 今野一雄訳, 『エミール』下, 昭和三九年, 岩波書店, 三五頁。
- (25) 『女子生徒の心理とその教育』, 三八頁。
- (26) 三好稔, 『差異心理学』, 昭和二六年, 金子書房, 二八八頁。
- (27) 東清和・小倉千加子, 『性差の発達心理』, 昭和六二年, 大日本図書, 一一四頁参照。
- (28) 天野隆雄, 「女子生徒の友情」, 『人文学会紀要』第一七号, 昭和六〇年, 国士館大学文学部人文学会。
- (29) 『増補若い女性の心理』, 一九一一—一九二頁。
- (30) 内山喜久雄, 『問題児臨床心理学』, 昭和四四年, 金子書房, 三七二頁。
- (31) Hall, *op. cit.*, p. 387.
- (32) バードウィック著, 今井欣悦・松山安雄・三宅興子訳, 「女性心理」, 昭和四九年, 原書房, 一五二頁。
- (33) 前掲書, 一六二頁。
- (34) Karl Hilty, Glück, Erster Teil, 1891, ss. 105—106.
- (35) Bertrand Russell, *The Conquest of Happiness*, 1930, Gerge Allen

& Unwin, p. 85, p. 119.

- (36) 『女子生徒の心理とその教育』、九頁。
- (37) 『増補若い女性の心理』、二〇二頁。
- (38) 『女子生徒の心理とその教育』、三〇頁。
- (39) E. Douvan & J. Adelson, *The Adolescent Experience*, 1966, John Wiley & Sons, Inc., pp. 252—254.
- (40) 渡辺真理子、「幼児の性差意識・性役割」、『教育心理』第二六巻第四号、昭和五三年、日本文化科学社、五九頁参照。
- (41) E. E. Maccoby (edited), *The Development of Sex Differences*, 1966, Stanford University Press, p. 15.
- (42) 『女子生徒の心理とその教育』、四〇—四一頁。
- (43) 孔健、『中国人とつきあう法』、昭和六三年、学生社、一九九頁。
- (44) ブルックス・リガン・シェンブ・マチュウズ、前掲書、九九頁。
- (45) セオ・ラング著、泉ひさ訳、『男と女のちがいはー性染色体からの出発ー』、昭和四八年、黎明書房、一九頁。
- (46) 「朝日新聞」(朝刊)、昭和六三年五月五日。
- (47) 『女子生徒の教育』、一六七—一六八頁・一七〇頁。
- (48) データ・バンク編集委員会、前掲書、六七頁。
- (49) 「お茶の水女子大学生の生活と意見報告」(昭和六〇年・お茶の水女子大学文教育学部哲学研究室)、『婦人公論』昭和六二年八月号、中央公論社、三三一頁。
- (50) 東・小倉、前掲書、九七頁。
- (51) 朝日新聞テーマ談話室編、『女と男ー男女に関する一章ー』、昭和六一年、朝日ソノラマ、九—二七頁。
- (52) フェヌロン著、志村鏡一郎訳、『女子教育論』、昭和四一年、明治図書、九四頁。
- (53) 戸田勝也、「高校生の希望職業にみる男女差」、『青年心理』第六六号、昭和六二年、金子書房、八一頁。
- (54) 『女子生徒の教育』、六二頁。
- (55) 『女子生徒の心理とその教育』、三二頁。
- (56) 津留宏、「男女における成人度の違い」、津留編、前掲書、一五三頁。
- (57) 大木薫、「女性は働く意欲を」、朝日新聞テーマ談話室編、前掲書、一二—二三頁。
- (58) データ・バンク編集委員会、前掲書、一六八頁。
- (59) ニューウーマン誌特約、安田容子訳、「一万六千人調査シングル女性の結婚観」、『婦人公論』昭和六三年三月号、二六九—二八一頁。
- (60) 朝日新聞テーマ談話室編、前掲書、五六—五八頁。
- (61) ブルックス・リガン・シェンブ・マチュウズ、前掲書、三二七頁。
- (62) 本間長世編、『新大陸の女性たち』、昭和五一年、評論社、一〇九頁。
- (63) 『女子生徒の心理とその教育』、二七頁。
- (64) 『女子生徒の教育』、一六六頁。
- (65) 稲垣、「性役割の習得過程」、津留編、前掲書、一四四頁。
- (66) 『女子生徒の心理とその教育』、四一頁。
- (67) 『増補若い女性の心理』、二〇二頁。
- (68) 東・小倉、前掲書、一九九頁。
- (69) ブルックス・リガン・シェンブ・マチュウズ、前掲書、三四八頁。

(本書教授・教育学)